

「コンダクター型災害保健医療人材の養成プログラム」急性期活動実習（第4回宮城 BHELP 標準コース、第2回宮城 BHELP インストラクターコース）を実施しました（2026/8/1, 2）

テーマ：日本災害医学会 地域保健・福祉の災害対応標準化トレーニングコース BHELP)

会場：東北大学災害科学国際研究所（宮城県仙台市）

東北大学と福島県立医科大学が実施している「コンダクター型災害保健医療人材の養成プログラム」の災害急性期活動実習として、第4回宮城 BHELP 標準コースと第2回宮城 BHELP インストラクターコース/ブラッシュアップコースがそれぞれ2026年8月1日（土）と2日（日）、東北大学災害科学国際研究所で開催されました。標準コースを33人、インストラクターコースを34人が受講し、講師として全国から11人のインストラクターが参加しました。コースコーディネーターとして当研究所の佐々木宏之准教授（災害医療国際協力学分野）が運営に携わりました。

BHELP（Basic Health Emergency Life Support for Public）は、災害発生直後の緊急避難場所や指定避難所の設営・運営を被災者の生命、健康維持の観点からサポートできる人材の育成を目的とした、日本災害医学会によるコースです。保健医療や福祉、行政職員、養護教諭らが受講することができます。災害発生直後の早い段階から健康への視点を持って対応することで、被災者の健康を守り、災害関連死を防ぐことにも繋がります。

まず学ぶのは、災害時の医療福祉に携わる人が共通認識として持つべき「CSCATTT（Command & Control, Safety, Communication, Assessment, Triage, Treatment, Transport）」と、それを応用した「CSCAHHH（Healthcare Triage, Helping Hand, Handover）」の考え方です。避難場所・避難所の指揮系統等を正しく認識したうえで、傷病者や要配慮者をトリアージし、必要な支援を現場で実施（Helping hand）したり、適切な外部機関に繋いだり（Handover）する必要があります。

参加者は6人程度のグループに分かれ、架空の災害状況と避難所のケースを元に、CSCAHHHに基づいて具体的な対応方法を考え、意見を交わします。最後に、感染症やエコノミクス症候群などの予防対策も考慮したうえで、指定避難所のレイアウトを考えます。講義だけでなく演習が重視され、多職種の参加者と意見を交わしながら考えることが求められます。

インストラクターコースでは、ファシリテーションの考え方や技術も学んだほか、Webでのコース開催を円滑に進めるためのオンラインツール（ZOOM）使用実習も行いました。修了者はブレインストラクターとして標準コースでの一通りの指導を評価され、合格するとインストラクターとして活動することができます。

今回は令和8年熊本地震の避難生活が続く中での開催となったこともあり、よりリアルに避難場所・避難所をイメージした研修となりました。

災害時に現場で適切な活動ができる人材を増やすことが、今後いっそう大切になっていきます。当研究所ではこれからも、実践的な研修会を継続して開催していきます。

文責：今野公美子（広報室）
（次頁へつづく）



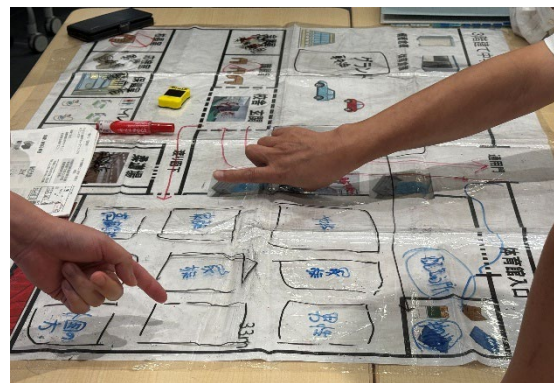
コースについて説明する佐々木宏之准教授



グループでの演習。参加者が書記を務めます



CSCAHHH の考え方に基づいて情報を整理します



避難所のレイアウトを検討する様子。通路や居住スペース、トイレ等への導線など、考慮すべきポイントがたくさんあります



標準コース参加者とインストラクターで記念撮影



インストラクター／ブラッシュアップコースでは、ファシリテーションについて学びました